

Saitô-Hidekatu

向井豊昭

1

青森発のいなほ2号が鶴岡に着いたのは午後一時に近かった。改札口から吐きだされる客を、山伏が一人、駅前の広場に突つ立ち迎えていた。

板でつくった山伏は迎える言葉を言うことができない。そんな山伏をおぎなつて、案内の板が、山伏の右にも左にも、そして頭の上にも掲げられていた。

ようこそ鶴岡へ。磐梯朝日国立公園。山形県立庄内海浜自然公園。鶴岡城跡。羽黒山。月山高原ライン。湯殿山。湯野浜温泉。芭蕉という文字も目に入り、ミイラという文字も目に入る。

「ウーン」と、昭は山伏の前でうなつた。羽黒山や月山がこのあたりにあることは地図の上で知ってはいた。三年ほど前、鶴岡への旅をころぎしてから、何度も地図を広げてきた昭である。旅は今日までのびのびになってしまったが、それは、妻や子どもをおいてきぼりの一人旅がうしろめたかったせいもあった。妻や子どもを連れてゆける物見遊山の旅ではない。しかし、その鶴岡が、はなはだしい物見遊山の場所だったことをはじめて知り、昭は思わずうなつてしまったのだ。

おいてきぼりにされてしまった三人の子どもの顔を昭は思いだした。妻の髪のおいまで思いおこし、「ウーン」と昭はまたうなつた。

みんなを連れてこなかった一人旅を悔やみながら、昭はもう一つのことを思っていた。そこにある庄内地方の長い歴史。歴史の中の人々の暮らし。昭の知らない庄内の自然。いつたい、それは、斎藤秀一に、どんな光や影を与えたのだろうか？ 三日や四日の調べだけは、とうてい秀一をつかみきれないだろうことを昭はいまさらのように感じていた。

彼はあたりを見まわした。デパート。土産店。旅館。建物の向こうには建物が見え、いきなり空に続いている。空の下は山や川、そして平野を、街はみごとにさえぎっていた。

秀一もまたさえぎられていた。三十年とちよつと昔、庄内平野の片隅で死んでいった一人の男の生きざまを知るものはほとんどいない。その男と出会うため、オレははるばる北海道からやってきたんだ！

気を取り直した昭は、背すじを伸ばして歩きだした。ポロシャツの胸には、丸いバッジがついている。白い丸の中いっぱい緑色の星を一つあしらったそのバッジは、国際語エスペラントをやるものしるしであった。

ドアを開けたハイヤーが乗り場に待っている。かがめた昭の頭に

は白いものがまじっていた。

「図書館へやってください」

声と一緒にハイヤーは動いた。

表通りをすぐに外れ、ハイヤーは幾度も裏通りを曲がった。道の両側には瓦屋根が続き、それは昭の目をひく。同じ雪国でありながら、昭のいま住む北海道にも、かつて住んだ青森にも、瓦屋根の家などありはしないのだ。昭が瓦屋根の下に住んだのは小さなころ、東京にいたころの話だった。

こみ上げてくるなつかしさを、ふと現われた立看板の大きな文字が押しつける。

クビ切り反対を叫ぶ立看板に書かれた労働組合の名前は、昭の知らないものであった。その名前を知っている鶴岡の人々は、何十年かたった後も、やはりそれを覚えていたのだろうか。それとも、斎藤秀一のたたかいのように、無名のたたかいとなつて埋もれていくのだろうか。

ハイヤーが止まった。

「ここですか？」と、昭はいぶかしそうにたずねた。噴水を噴きあげる堀の向こうに、やはり瓦屋根の建物が建っている。二階建ての白い建物の正面には、「大宝館」という額が掲げられていた。

「そうですよ」と、運転手は答えた。ドアはもう開いている。

銭を払い、昭は車をおりた。緑にかこまれた大宝館に近づくと、玄関のわきの「鶴岡市立図書館」と書かれた看板の文字が、ようやく昭の目に入った。

鶴岡城の跡に建つその建物は、大正天皇が位についたことを記念し、図書館、物産陳列所として建てられたものであり、「聖人の大宝を位と曰う」という易の言葉から大宝館と名づけられたものだといふ。しかし、大宝という言葉は、はるか平安の昔から鶴岡にとつてゆかりのある言葉でもあった。そのころから、そのあたりは大宝寺

と呼ばれ、大泉氏によつておさめられていたのである。その後、土地と人は最上氏の手にわたり、本庄、上杉、そしてまた最上、そして酒井と、庄内地方の支配者は変わつていった。それは、戦いの歴史でもあり、そのつながりの果てに、日清、日露の戦争もあらわれってくるのだろう。

斎藤秀一の生きた時代も、戦争の最中であつた。治安維持法によつてしょつぴかれ、病気にかかつて彼は死んだのだ。秀一の生きたそのころの時代は、幼かつた昭にも、一つの傷を彫りこんでいる。

2

昭が東京で生まれたのは、昭和八年のことである。飛行機工場で働く父が事故で死んだのは、小学五年の時だった。昭和二十年がはじまつて間もないころである。そして、その年の三月、絶え間ない空襲の東京を逃れ、母のふるさとである下北半島へ移り住んだ。

雪割りのはじまる四月、昭は新しい学校に入った。石のように固く凍つた分厚い道の雪を、鋸でひき、まさかりで叩き割る人々の動きは、学校への長い道のりに変化を持たせるものであつた。海沿いの町の西のはずれにあつた叔父の家から、東のはずれの学校までは一時間近い道のりがあつたのだ。五分とかからぬ通学距離しか知らなかつた昭にとつて、学校はそれだけでも新しいものであつた。しかし、その新しい学校に慣れるためには、まるで雪割りのように昭自身が叩き割られねばならなかつた。

新学期がはじまつてすぐの国語の時間のことである。先生に名を指され、昭は教科書を読ませられた。

「ナンド（お前たち）、よく聞け。標準語の読み方だ」

先生は鼠色のチョビひげをうごめかせて露払いをおこなつたものである。与えられた任務に火照つていく自分を感じながら、昭の朗読は息づいていった。

「ジョンズ（上手）だ。ジョンズだ」

読み終わった昭は、チヨビひげのほめ言葉を受けながら席に着いた。屏風のように立てられた教科書の陰からは、うらやましさと、ねたみを込めたたくさんの目が昭を見つめていた。

鐘が鳴り、チヨビひげが出ていくと、みんなは一斉にストーブめがけて飛んでいった。毎朝一度、校舎の軒下から小使が運んでくる薪は、氷のような雪でつながっている。濡れた薪は思うように燃えなかつたが、そこに子どもたちが集まると、おしゃべりだけは燃えあがつた。しかし、そのおしゃべりの言葉は、東京から来て、まだひと月もたつていない昭にとつて通じようのない言葉であつた。

昭はたった一人、机に向きあい消ゴムをもてあそんでいた。円柱型のしゃれた消ゴムは、父の死んだ後、父の引出から昭が見つけたものである。白い角型のごくありふれた消ゴムさえも、戦争による物不足のために買うことのできなくなつてしまつたところである。宝物のように消ゴムのやわらかさをもてあそぶ昭の耳に、ストーブのまわりの喧嘩の声がとどいてきた。

「押つつけんなジャ！」

「ワ（ぼく）でねえ。茂ア押つつけたんだデ！」

「ナモヨ（違う）。ワ、ストフさ、あたる氣したただけだね！ 避けねえしてワリ（悪い）んだ！」

「茂、ナ（お前）、ワリんだ。わびろ」

ブルドッグのようなほほをうごめかせ、きめつけるように言つたのは、ストーブの正面で思いきり大きなあぐらをかいているクラススのボスであつた。

ゼニタムシをおでこにつけて突つ立っている一人の子どもが、とがつた口を急にしばませて、前にしゃがむ子に言つた。

「許してケロ」

「それだばワカンネ（駄目だ）。標準語でわびろ」

標準語という言葉に力を入れてブルドッグは言つた。笑いがうずを巻き、みんなの目は、机に向かう昭に一斉に向けられた。

「ぼくガ、ワリかつたです。許してください」

ゼニタムシがおどけた声で言う、みんなは口をあわせて言つた。

「ぼくガ」

「ぼくガ」

「ガ」

「ガ」

「ガ、ガ、ガ……」

乱れた声の中からブルドッグが立ちあがり、昭をめがけてやつてくる。みんなは一斉にブルドッグに従い、昭をとりまいた。

「昭、ナ、ナシテ（なぜ）ガつてヒル（言う）のヨ」と、ブルドッグはあごを突きあげて言う。

「……」

「ナ、サキタ（さつき）本コ読んだ時、ムタト（しよつちゅう）ガつて読んだベセ。東京の読み方ア、ズンプ（随分）おかしいな」

助詞のガを半濁音でしか発音しない彼等にとつて、昭の見事な濁音は耳ざわりなものであつた。

「ガつてヒつてみる」

言つたのはゼニタムシである。

「ガ？」と、昭は小さな声で聞き返した。

波のようなあざわらいが、昭に押しよせた。昭は思わず、手にした消ゴムを強くにぎつた。

「どら、ワさ寄越ヘジャ」

ブルドッグが昭の指に右手をかける。昭の指に力が入つた。ブルドッグは両手をかけて、昭の指を開こうとした。

「駄目だよオ、おかあちゃんに叱られるよオ」

「おかあちゃん？」

ブルドッグが目を剥いて言うのと、みんなはまた笑った。「何がおかしいんだよ」と、昭はもう半分泣いていた。

「おかあちゃん！」

「おかあちゃん！」

わざとらしい声色が昭をとりまいている。

「おかあちゃんて悪いのか！」と、昭の声はふるえていた。

「ワド（ぼくたち）にア、おかあちゃんなんていねえんだ。アッパてんだ。アッパって」

ブルドッグは、さげすむように言った。ゼニタムシが、つぎはぎだらけの黒いマントを昭の後ろで広げたのはその時だった。昭の頭の上でマントがひらめき、昭はくるまれた。

拳が昭の頭をおそった。いつの間にか消ゴムはもぎとられ、昭は思わず叫んだ。

「馬鹿ワラシ（餓鬼）！」

それは、昭がはじめて口にしたその土地の言葉であった。マントにくるまれ、打たれながら、言葉はうめき声となってマントの外へもれつづけた。

戦争が終わった後、新制の中学校から、その町にできた定時制の高等学校に昭は行つた。やはり国語の時間である。朗読を終わり、座りかかった昭に向かつて国語の先生は言つたものである。

「君、東京で生まれたっていうけど、随分なまりが多いじゃない」

早稲田で学んだという下北生まれの若いその先生の言葉は、昭など及びもつかないなめらかさであった。

自分ではまともに読んだつもりでいながら、確かに、昭の読み方には下北のなまりがあつた。そして、それがどんな理由のためなのか、国語の先生は知らなかつた。

東京へ出ていったブルドッグと、定時制に通う夕暮れの道で出会つたのは、そのころのことだった。パーテンをやっているというブルドッグは、なつかしように昭に言葉をかけた。

「やあ、しばらくじゃないか。「元気かい？」」

土地の言葉に言いかえるなら、それはこういう意味である。

「オー、スバラダ。マメスグデラナ？」

3

鶴岡中学校を卒業した十七才の齋藤秀一が、東京の駒沢大学の予科に入ったのは、大正十五年のことである。

三月三十日 水曜 曇

新荘で酒田行の汽車に乗って津谷についたまでは知つて居るが其後どうしたか分らない。列車はどん／＼進んで居る。昨夜の疲れで眠つたのだ。近くに乘つて居る人にこんどどこだと聞くのもいやだ、しかしとうに余目を越したのではないかしらなど心配してゐるとやがて止つた。其処が余目だことを見付けて安心した。朝早くはよい天気だったのがだん／＼曇つて新荘ではチラ／＼と雨が降つて来たが大したことはなくてすんだ。板谷峠をこえるまでは雪はないと言つてよかつた。が其処からずつと山形の近くまで大部分白く被はれてゐた。次に山形付近はそれが少くて又新荘付近に来ると時々多かつた。鶴岡に着いたのが一時半頃。其処から家までの海道は大部分乾いてゐたが家のまはりの軒下はまだ四五尺の高さは十分あると思はれた。新助の小平が来て居る。使をさせるため借りておいたので、学校も分教場に行くのださうだ。土産として妹に縫をやり、父に焼物のだるまを持つて来た。母にも買ひたかつたがどうにもかうにも金がなくなつて仕様がなかつた。

予科一年生としての生活を終えた春の休みの日記である。十日前には、早く帰ってくるようにとの父からの催促を手紙で受けている秀一であった。

春の遅い雪国の四月を、秀一は終日、読書でつぶさなければならぬ。ときには、父に連れられ弔いに出かける程度が秀一の外出なのだった。父の秀苗は、曹洞宗の小さな寺、泉流寺をあざかる坊さんだった。

四月十一日 月曜 晴

午前中は雪割りをする。いよ／＼今日上京することにする。ずっと前には去年のことから推して休は十日頃迄だといった。それから休暇が十六日迄だと発表されてからも花祭や桜を見たいのや家の大盤若の手伝をしたくないと思つて十日迄だと知らしておいた。それでも休で帰るとすぐ休は十六日迄ですといへばそれでもよいのであったがやはり早く上京したい心もあるので黙つてゐた。それから時々そのことを言はうか言ふまいかと躊躇つてとう／＼今日迄来てしまつた。父は午前中も外へ出て午後も又出るからとてその前に今月の学資をくれた。その時は帰ることがそれ自身悲しく思はれたが行きがかり上も少しも言ひわるとどう／＼来ることにした。鶴岡へ来る迄も腹の底に何かうんと陰気なものが坐りこんでゐるやうに気が晴れない。前に新聞で東北線が雨のため普通となり奥羽線がひどくこむとあつたのでこれを機会に信越線廻りの切符を買ひ午後三時五十二分の列車に乗つた。……

四月十二日

渋谷についたのが十二時すぎ。寮に受験生が大分来てゐるが帰つて来た人としてはいないやうだ。勿論寂しいが昨日よりは幾分うすらいだ。夕方父へ葉書を出して無事ついたことと伊前氏の住所を知ら

せる。湯に入つて新町の桜を見る。まるで花の屋根をくゞつていくやうだ。夜桜はいゝものと聞いてゐるけれども新町の入口の方はよいとしてだん／＼行くと燈はあつちこつちにポツリ／＼とついてゐるばかり人通りさえ稀でたまに黒い犬が居るといった具合で昼見た方がよいだらうと思ふ。床に入つてからつく／＼家の様子を考へて泣かざるを得なかつた。困難に關らず自分を学校へ出してくれる有難さに対してゝある。出来るだけ切りつめた生活をして学資を送つてくれるのである。もつと家にゐて手伝ひして来ればよかつた。しかられて小言を言はれながらでも何でもない。こうして一時間も感謝したり学校をやめても家の人に手助になつてやりたいと思つたり色々筆で言へないせまつた感じが胸の中を往来し涙が止度もなく出た。

四月十三日 水曜 晴

昨日も今日もこれからも数日間はしまつた本箱や本立等を出さずにかばんをほうり出し、靴下をなげ出し、机の上には家にもつて帰つた本を乱雑に重ねて特に旅行案内を一番上に目につくやうにのせてみたまれない心を少しでも満足せしめることにした。大抵の人は家を長く離れてゐるとホームシックにかゝると言ふが私のはそうでない。家を離れる際それからその翌日あたり特にひどくてだん／＼少しづゝはうすらいで行くやうだ。……

都とふるさとの間を振り子のようにゆれる秀一がエスペラントにひかれましたのは、この頃である。五月十六日の日記の中にはこんなことが書いてある。

読売新聞でエスペラント語に訳された日本の小説とか何といふ題で「外人は日本を知りたがつてゐる、日本人は外人に日本を紹介す

ることを望んでゐる、それには最も翻訳に都合よい 에스ペラント語によることがよい。しかるに我國の文学にしてこの 에스ペラント語によつて訳されたものは少い。これを世界に普く広めんとするにはこれを発行すべき出版書律が必要だ。」といふ意味が述べられてゐた。我國を世界に紹介するのに 에스ペラント語が最も都合よいものかどうか私には判断しかねる。何となれば名の死んだ言語だといふことも聞いて居るし、又 에스ペラント語に対する知識のない私には分らないのが当然かも知れないが、これについて正確な知識をもつた人達だつて疑はしいだらうと私は思ふ。それにしても 에스ペラントといふ名を聞く度に私は妙に 에스ペラントを研究したくなる。

「妙に 에스ペラントを研究したくなる」と、ものめずらしげに書いてある秀一は、予科から東洋文学科に入った昭和三年、日づけのない日記の上にこう書いてゐる。

緑の星と希望する者の言葉

我々は希望を持たなければならぬ。将来に向かつての希望を希望のない生活は死に等しい。特に青年にとつては希望が全生活ではないか。我々の歩みは遅いかも知れない、でも一歩々々をしつかり踏みしめろ！ 時には躓く事だつてあり得る、しかし躓いたら起きろ、ひたすら希望に向つて進め！ これによつてすべての発展は生れるのだ。総ての進歩が出来るのだ。希望する者の言葉は其始めに於ては彼一人しか話さなかつた。しかし彼が遙か彼方に緑の星（それは希望の象徴だ！）をのぞんで邁進すれば彼の同士の数は雪の上をころがされたる雪玉の如く増して今や到る所に希望する者の言葉が聞かれるではないか。希望する者の言葉とは何か？ 簡単に其発生の由来を述べよう。近世の一代特徴たる民族主義の勃興と国際性の発達を思ひ出して欲しい。それに伴つて起つたのが母国語尊重の

運動で、植民地や既に滅亡してしまつた国々の内からも盛に叫ばれる様になつた。アイルランドに於て、インドに於て著しい実例を見ることが出来る。我は我々に近い朝鮮のことを思ひ出せばよい。これは、この言語運動は近代帝国主義の数世紀間に於ける弱小民族に対する圧迫、従つて土語地方語の徹底的撲滅作に対する大なる反動である。とにかく近代に於ては民族自決の思想と共に自国語尊重、自国文化興隆の声が甚だ強いのだ。一方国際性は日々に発達して

手直しの跡の多いその文は、そこでとぎれている。しかし、その文の題の中に書かれてある「緑の星」とは 에스ペラントのマークであり、「希望する者」とは、日本語におきかえた「Esperanto」の意味なのだ。

国際共產主義運動の波にも乗つて、大きなひろまりをみせていたその頃の 에스ペラントである。秋田雨雀が、モスクワの放送局から、日本のプロレタリア文学について 에스ペラントでしゃべつたのは、「緑の星と希望する者の言葉」が書かれた年であつたし、プロレタリア 에스ペラント協会が日本にできたのは、その二年後のことであつた。

秀一は、カナ文字運動、ローマ字運動にも首を突つこみ、大学を卒業する記念のアルバムによせがきには、「Nippongo wo Rōmaji de! Nipponikino Rōmaji de!」という日本ローマ字会のスローガンを、ローマ字書きで書いてもいる。

昭和六年、妹の静子の脊髄カリエスによる死と前後して秀一は大学を卒業し、山形県東田川群大泉村、大泉尋常高等小学校の代用教員となつて大平分校に勤めた。

今は朝日村とよばれるそぬあたりに行くためには、秀一の生まれ育つた東荒屋の赤川をさかのぼらなければならぬ。やがて川は、

東へ梵字川、西へ大鳥川と二つの流れに分れていくが、川のようにす
を地名であらわす落合部落まで来る時、山はきわだつて間近くなる
二つの川は谷をけずり、大泉小学校のある上田沢までは大鳥川を十
数キロもさかのぼらなければならぬのだ。

分校のある大平への道は、その手前の下田沢から東へ折れる。杉
の葉が影を投げる崖と切り通しの坂道を何度も曲がり、山の上に登
りつめると、その目の下の小さな盆地にへばりつく三十軒ほどの家
があるのだ。それが、大平部落のすべてである。

4

窓の向こうに空は見えない。壁のように窓をふさぐ岩内岳の色あ
いを、昭は教室の真中からぼんやり見つめていた。エゾマツの濃い
縁に、カエデやナラの秋の色づきが斑点をうっている。

その四月、勤め先の小学校を変えた昭がはじめてその山を見た時、
そこはまだ雪でおおわれていたものだ。その雪がふたたび山をおう
のも、遠い先のことではない。

昭の前では、一人の六年生が国語の教科書を朗読している。その
右に三人、左に一人が六年生のすべてなのだ。

「先生、漢字書いたよ！」

昭の背中へ向けて、教室の前の方から男の子の声が出た。たった
一人の五年生である。その隣では、三人の四年生が印刷された国語
の問題をといている。四、五、六年が一つの教室で勉強しているの
だ。

「先生、漢字書いたよ！」

同じ声が出た。

「漢字書いたってさ！」と、六年生の一つの席から助太刀の声がし
た。

「書くの速すぎるぞ」

昭の首がのつたりと振り向いて言った。五年坊主の口もとから白
い歯が消える。

「冗談だよ。遅いくらいだ。さあつて、どうしたらいいかな。そう
だ。君たち、段落一つずつ、順番に読んでいきな。間違ったら教え
あつてな」

六年生に言いすてると、昭は五年坊主のところへ行つた。

「ああ忙しい、忙しい。さあつて、どうしたらいいかな。うん、そ
うだ。はじめから読んでみるか」

五年坊主が教科書を持った。

「ザメンホク」

「ホクじゃない、ホフだろう」

「ホフ」

「はじめつから」

「ザメンホフ」

「それから？」

「……」

「伝」

「はじめつから」

「ザメンホフ伝」

「それから？」

五年坊主はまたつまった。

「いいや、先生が一回、読んで聞かせるからな」

道ばたに商品をならべて、客を呼ぶ商人の声。客がねざる声。車
の音。見回りのけい官のあらあらしいくつの音。人のうずととも
に、物音も、町じゅうの空気をかき回していた。ポーランドの、ピアリ
ストックという町での、ある日の光景である。

町のひとところ、人だかりがしている。かん高い女の声と、その声をたたきつけるような男の声が、あたりの物音をするどくひきさく。「なんだ。なんだ。」と、あとから、あとから、人々がかけ寄る。その人々をかき分けて、けい官がやってきた。

「どうしたというのだ。」

客と女の商人の言い争いであつた。客の男は、ドイツ語で説明した。商人の女は、ポーランド語で言いまくつた。けい官がロシア語でどなつた。

「ロシア語で話せ。ここはロシアの領土だ。」

女は、口をつぐんだ。言いたいことは山ほどあるのだが、ロシア語はかたことしか話せないのだ。くやしなみだで、目がぬれている。

けい官の後ろの人の群れの中からさけんた者があつた。

「ポーランド人がポーランド語で言うのが、何が悪いのですか。」

「なにつ。」

けい官は、やにわに、その男のうでをつつかんだ。そのままぐいぐいと男を引っぱって立ち去つていった。その、ふたりの後ろすがたに、人々の目が注がれた。けい官に対して、いきどおりの目を向ける者。連れられていく男に、同情のまなざしを注ぐ者。かれらはみんなポーランド人やユダヤ人だ。けれども、連れられていく者に、あざけりの目を送る人々もある。かれらはロシア人だ。そのほかに、ただものめずらしげに見送つている連中もある。かれらはドイツ人である。

その人だかりの中に、ひとりの少年がまじつていた。この少年こそ、後に国際語エスペラントを作り出したザメンホフであつた。

ザメンホフは、一八五九年に、このピアリストックの町で、ユダヤ人の子として生れた。

「ユダヤ人……」

そこまで読んで、昭は思わずつぶやいた。

そのころ、昭は、教員仲間と一緒にとりくんでいたアイヌの子どもたちへの教育運動から逃げだしていた。駅もあり、札幌への日帰りも楽にできる場所から、全校児童がたった十八人という山奥の学校を望んで移つたのも、そのあたりにはアイヌがいけないという理由からであつた。

逃げてきた山の奥にも噂話はつたわってくる。あいつはニセモノだつた。あいつは階級意識がなかつた。あいつは教室ベツタリでアイヌ人民との結合はなかつた……

その通りの昭ではあつた。しかし、昭をなじる仲間たちの言葉——アイヌにとっては侵略者の言葉である日本語で、彼等はアイヌの子どもたちにものを教えるのだ。その矛盾は、昭をつまずかせた大きな理由であつた。

人種や民族、国家を超えた言葉の理想にひきつけられ、昭は一人でエスペラントを学びはじめた。

斎藤秀一のことを知つたのは、翌年の春のことである。日本エスペラント学会の機関誌に、日本文で、四ページにわたつて紹介された秀一の仕事はこんな言葉でしめくくられていた。

斎藤秀一は断固として国際主義と民衆の立場とを貫き、自己の信念に生き、大日本帝国政府にただ一人でたちむかつて、たおれた。彼の肉体は滅びたが、その雄々しい精神と、ユニークな言語思想はよみがえつて、私たちを永久に励ましている。

昭には及びもつかない勇ましさであつた。できることなら、その勇ましさにあやかりたいと思ひながら、昭は半ばうたがつた。うた

がいなら、同じ雪国の、同じ教師であった秀一に、昭は心をひかれるのであった。

5

大平分校に勤めた齋藤秀一がとりくんだのはローマ字の仕事だった。大泉ローマ学会をつくり、分校の生徒、部落の人たちには勿論、

本村にも出向いてローマ字を教えはじめたのだ。その年の十月に出されたガリ刷りの機関誌、『ROOMAZI NO KIKANSYA』の三号を見ると、子どものためのローマ字書きの読みものもせている。中野重治の作品であり、Rōdōsya, Kosakunin, Zeikin などという単語が出てくる話である。

ナキワメク

コ オウタ セイト

キヨウ モ サンニン

ユスブリ ナガラ

カク ジ ワ マガル

「20ページ ヲ

ヒラキナサイ！」

ヒトゴロシ

チュウギ ト オシエル

ココロ ワ クライ

「スミ ガ ナイ

コガタナ モ ナイ

「カッテ モラエ！」

クチサキ ダケ ワ

ツヨソウニ ユウ

先生になつて間もない七月に、名古屋から出されたカナ文字による文学雑誌「サキガケ」に、秀一は「キヨウシツ フウケイ」という題でこんな短歌を発表している。

その年の十一月、山形市の、あるそば屋の二階に七人の人間が集まり、山形県教育労働組合が誕生した。高橋幸蔵、村山俊太郎などのメンバーが警察に挙げられたのは次の年の三月であり、関わりのなかつた秀一にも、その出来事は関わってくる。山形県庁学務部は、思想取り締まりの係をおき、校長たちの尻を叩きだしたからだ。

小学校長の

「正しき認識」確立

左傾予防の立案なく

校長の講習会

過般の本県小学校長会議は？に本県から赤化訓導を出した事から思想善導上特に注意すべき事項と夫れに対する対策が会議の中心問題となつたが結局具体的な左傾思想防止対策は生む可もなかつた其れで本県では先づ以て小学校長の思想を啓発指導して「社会に対する正しき認識」のかん養する事となり来る可き本夏休暇を利用し思想問題講習会を県下三地方にて開催する事となつた其日程は

△八月一日、二日、三日——米沢市

△同月二日、三日、四日——山形市

△同月三日、四日、五日——酒田市

に決定講師は安倍学務部長と警視庁方面からも招聘する事となるらしい

山形県教育労働組合に手入れのあった二カ月後、昭和七年五月十日の荘内新報では、こんなことがつたえられている。

5

「シヨクインカイ ダ ト イウ カラ デカケテ ユク。コーチ
 ヨー ワ ボク オ ライガクネン カラ ヤクワ ニ デロ ト
 イウ。オオダイ デモ タクサン ナ ノニ ヤクワ デワ オ
 ハナシ ニ ナラナイ。アト ノ ツゴー モ アル ノデ ショ
 ーチシタ ト イッテ オク。ヨル カメイ サン ガ キテ コ
 ッチ ノ ヒキツギ ワ スム」

たどたどしい声と一緒に、昭の目は、掌ほどの日記帳の上を追っていた。細かな筆記体で、ローマ字文がびっしりと書かれている。図書館の係の人がホテルで読むことを許してくれた昭和七年の日記である。下の食堂で夕食をすませ、昭が部屋にこもったのは二時間ほど前のことだった。日記は三月の二十三日までを読み終えただけである。

テーブルの上に日記帳をおき、昭は疲れた目をこすった。ソファーにすわった昭の背中に、クーラーが風をおくっている。

昭は腕の時計を見た。七時を過ぎていた。「電話くれないのかなあ」と、昭はつぶやいた。無事、鶴岡に着いたことを、ホテルの電話番号と一緒に電報で教えてやった昭である。人気のない学校の鍵を開け、妻や子どもが声をとどけてくれることを待ち望む昭だった。

煙草に火をつけ、昭はテーブルの上に投げだした地図を取った。

八久和ダムという文字が、昭の目に入る。大泉小学校のある上田沢から東におよそ十キロ。それは、直線での話である。山の腹をくねる道の長さを引きのばしてみれば、十五キロはたつぷりある。

ダムの底に村があった四十年よりもっと昔、秀一は、大平からそ

こへ追われたのだ。大平でもたくさんだったというのに。
 くわえ煙草で地図をおき、昭の手は大学ノートを取った。図書館でとったいくつかのメモの中から、昭の目は一つの手紙の下書きを選んでいた。

お変わりもないことと存じます。

毎日寒い日ばかり続きますが東京は如何ですか。雪は降り始めの模様ではどんな大雪になることかと案じられました。只今平地で五六尺ですから心配することもないやうです。

さて、私は去年お宅にお世話になって例の詮衡を受け、幸にも合格はしましたが、いまだに一向採用してくれる様子がなく、大いに弱ってゐます。聞く所では、教員として就職するには市会議員を通して運動するのが一番有効で、校長に運動するのも成功し易いさうですが、私にはさういふ方面の知合いは一人もなく実に困り果てゝゐます。

もし幸にしてあなたに市会議員なり校長なりにお知合いがあらましたら、お頼み下さることは出来ませんでせうか。甚だ勝手がましいお願ひで、誠に恐入りますが、助けると思つてお骨折り下されば仕合せです。履歴書はいつでもお送り申します。

さやうなら。

二月四日

波多野 徳 豊 様

齋 藤 秀 一

灰皿に盛りあがったぶどうの皮に煙草の火を押しつけ、昭はまた日記帳を読みあげた。

「24、モクヨービ、ハレ。カナモジガキノ、テンモン ノ ハナシ
 ト イウ ホン ガ クル。」イズミ、ノ トクベツゴー ダ。

ヒルカラ ノコギリ、カナズチ ナド オカリテ キテ マズ
ホシ ノ ニズクリ ヲ スル。ドーヤラ ミカンバコ フタツ
ニオサマル。オオダイ オサル ト ナツテモ ノコリオシイ
ト イウ ホドノ ツヨイ キモチ モ モテナイ。ガ、ナニセ
チユートーガツコー ノ クチ ガ アル モノ ヤラ、 ナイ
モノ ヤラ ソレ ノミ シンバイダ。25、キンヨービ、クモリ。
キヨー モ ニズクリ ノ シタク ニヒ オ ツイヤス。チカ
ゴロ シンブン ニデテ イル アンサツダン ト イウ ノワ
イワユル イモズルシキニ カンケイシヤ ガ カギリ モナ
ク アガツテ クル。ヨル ワ ムラ ノ ヒトタチ ガ ソー
ベツカイ オ ヒライテ クレタ ノデ、カエツテ キテ ニツキ
オ ツケテ イル イマ ワ 11ジ ハン。26、ドヨービ、ハレ。
アサ 6ジ ニワ モー メ ガ サメル。ニズクリ オ スマ
シテ ムラノ ヒト ニ オオバリ マデ ショツテ モラウ。ヒ
ルメシ オ スゴシテ カラ ヤツカイニ ナツタ ウチ ニイ
トマゴイ オ シテ カエル。コドモタチ ガ ムラハズレ マデ
オクツテ クレル。ウチ エ ツイタラ モー タソガレダ。
27、ニチヨービ、クモリ。ヒサシブリ デ ユツクリ シタ、キモ
チ ニナル。ユニ ハイッテ イヨイヨ サツパリスル。タニザ
キ ジュンイチロー ロン オ マトメヨー ト オモツテアレ
コレ ト ホシヲ ヨムガ ドーシテ ナカナカ ケツロン ガ
ウカビアガツテコナイ。コレジャ シメキリ マデ ムズカシイ
ゾ。28、ゲツヨービ、クモリ。ヤスミ ニ ナツテ ホントニ
ンキ ダ。コノツキ ノ ウチニ ダス ハズ ノ ローマジ ジ
ダイ ノ ゲンコー オ ヤツト カク コト ガ デキタ。ヨー
ケイシ ニ 8マイ。カナリノ ブンリヨー ニナル ハズ。コ
レデ ゼンタイ ノ ナガサ カラ ミタラ 1、4 クライダロ
1。29、カヨービ、フブキ。ヒルカラ ツルオカ エ デカケル。

ゲンコー ト ドーニン ノ カイヒ オ オクツタリ、ザツシ
オ カツタリ。ウチニ カエツテ キタラ モー クラク ナル。
ソレカラ ザツシヨミ ニ ネットチュウスル。"カマラード"ニ
"トキドキ アタマ オ モタゲル ウスツペラナ ギロン"
タル エスペラントシキノ ローマジ ガ コトゴトシク ノツテ
イル ノ ワ シャク。30、スイヨービ、ユキ、クモリ。トート
1 11ジ マデ ネボーシテ シマウ。ザツシ "レーニン ケン
キュー" ガ ツク。カミ ガ アツク ナリ、ペイジ ガ マシ
タ ノデ ダイブ プアツニ ナツテ イル。イチニチ オザツ
シヨミニ スゴシテ シマウ。デモ ナンノ タメカ ツカレ
ガ キテ ノーリツ ガ イッコー アガラナイ。31、モクヨー
ビ、クモリ、ユキ。"プロレタリア ブンガク" ガ クル。キジ
ノ カキカタ カラ ミテモ ハツキン オ ヨソーシタ モノ
ノーヨーダ。ナニブン ソーカンゴー ノ ホカ ワ ミン
ナ ハツキン ダ ト イウ カラ。ハンセンノ ブンガク ニ
ツイテノ キジ ワ オモシロイ。キヨー モ ユニ ハイル。
コノゴロ ユニワ タイヘン メグマレル。カクベツノ シゴト
モ ナイ シヤスミノ アイダ ワ トニカク ノンキダ。
4ガツ 1、キンヨービ、ハレ。イヨイヨ カキモノルイノセ
イリ ニ ハイル。テ オ ツケテ ミルト イヨイヨ コミイッ
テ キテ イツ ハツベシ トモ ミエナイ。ユーカタ トキワヤ
ノ アルジ ガ シゲル ニ ムカイニ キタ トテ ヤツテ
キテ、ヨツテ カエレナク ナツタ ノデ オクツテ イツテ
トマル。2、ドヨービ、ハレ。ヒル マデ ニ カエツテ キテ
マタ キノーノ セイリノ ツズキヨ ヤル。ネル マデ
ニ ドーヤラ コーヤラ シマツ オ ツケル。チユートーキョ
ーインニ ナレタカドーカチチガキニイッテ
クレタガワカラナカッタソーダ。ユーベオチャオノ

ンダ タメ カ ナカナカ ネムレナカッター ノデ アタマ ガ
 ダイブ ツカレテ イル。3、ニチヨービ、ジンムテンノーサイ、
 ハレ。シンブン ノ キリヌキ オ ハリツケル。チュートーキョ
 ーイン ニ ナレタ ト スレバ シラセ ガ キテ イ ソー
 ナ モノ ト オモツテ ユービンキョク エ イッタ ガ ダメ。
 シンブン ニモ デテ イナイ。4ジコロ デカケテ クラク ナ
 ッテ カラ ホンコー ニ ツイテ トマル。シユクチヨク ワ
 オカベ サン ガ シテ イル。4、ゲツヨービ、クモリ。ヤハリ、
 ジブン ノ ウチ デ ナイト ユックリ ネムレナイ ト ミエ
 ル。ヒル マデ イテ、ヒルメシ オ タベルト イヨイヨ ヤク
 ワ エ クル。ナル ヨーニ ナレ！ ト オモツテ クル。
 ジツニ 3ジカン ハン アルカナケレバ ナラナイ トワ アキ
 レタ モノ ダ。バン ニワ ボク ノ タメノ カンゲイカイ。
 5、カヨービ、ハレ。ハジメテ ココ ニ ヒトヨ オ スゴス。
 ニューガクシキ ダケ デ オシマイ。ヒルカラ ケサキチ(？)
 ノ トコロ ニ ヨバレル。バン ニワ ウメキチ サン ガ
 キテ イチジカン イテ ユク。チュートーキョーイン ニ ナン
 カ ナレヨー ガ、ナレマイ ガ ココ オ スケダシテ シマオ
 ー カ トモ カンガエテ ミル」

昭の声を、電話のベルがさえぎった。
 「もしもし」と、昭ははずんでいた。
 「電話をおつなぎします」
 声が切れ、「もしもし」と代わった声に、昭はほほえんだ。
 「ああ、ぼくだ」
 「元氣？」
 「ああ。そっちは？」
 「聞こえるでしょ？ この声」
 「カッチか？」と、受話器をふるわすけたたましい泣き声に、昭は

言った。二番目の子どものことである。

「御名答」

「どうしたんだ？」

「職員室に先に入ろうとしたらね、オチビさんが、後ろから髪の毛を引っぱったの」

昭は思わずふきだした。ふたりの喧嘩が目に見えかんでくる。

「収穫はあったの？」

「うん。図書館に相当いい資料があつてさ、今、斎藤秀一の日記を借りてきて読んでるとこなんだ。そしてさ、それがまたすばらしいの。神様じゃないんだよ。山の中の学校からぬけだすことを考えたりしてさ。身につまされちゃってるんだ」

「来年は、ここから出るわよ」と、妻はすかさず言った。一年生に入る長女の智香を心配して、口ぐせのように同じ言葉をくりかえす妻のこのごろなのだ。言われるまでもなく、もう四年目の山ぐらしはたくさんであった。

「智香、そこにいるかい？」

「代わるから」と、妻の声が消えた。

「智香か？」

答えはなく、妻の音が響いてくる。

「いいかげんにしなさい！」

おさまりきらない泣き声は、二つに重なって一層はげしい。

「どうしたんだ？」

「喧嘩してんの」

小さく答えた智香の声は、すぐに妻に代わってしまった。

「電話、切るわ。うるさくて、話にならないもの」

「また、くれよな」

電話の切れる音をなごりおしそうにたしかめて、昭は受話器をおいた。小さな戦いを想像する昭の顔は、ひどく平和にほほえんでいた。

る。

ぶどうをつまみ、茶を飲むと、昭の目はまた日記帳にうつっていた。ほほえみは、もうない。四月から五月、五月から六月へと日記帳はめくられ、九月に入った時、腕の時計はもう十一時を過ぎていた。

「5、ゲツヨービ、クモリ。イチジカン ジュギョー オ シテ
ウチ エト カエル。ゴゴ ワ ツルオカ エ イッテ カイモノ。
”ワレラ イカニ イクベキ カ?” ト イウ ホン オ ヨム。
ハジメニ デテ イル ”イワン ノ バカ” ワ オモシロイ
コト ワ オモシロイ。タダシ カキテ ガ トルストイ ノ
ムテイコーシユギ ニ キョーメイシテ イル ラシイ ノ ワ
モノタリナイ。ト イウ ヨリワ ハンドーテキ ダ ト イッテ
モ ヨイ。6、カヨービ、アメ。シヨクインカイ。ヒルカラ コー
チョー ニ ヨバレテ マン 6ジカン ト イウ モノ セツキ
ョー オ サレル。ツマリ シソー ガ イケナイ ト イウ ノ
ダ。ヤクワ ニ イッテ ガサ オ ヤッテ キタ トモ イ
ウ。クビ オ キル トモ オドカス。T ト コーサイスル
ナ トモ イウ。セイヤクシヨ オ カイテ イチオーワ ケリ
ガ ツイタ ヨーナ モノ ノ、アト デ ナニ ガ デキル モ
ノ ヤラ トント ケントー ガ ツカナイ」

そこまで読み、「だらしないなあ」と、昭は思わずつぶやいた。T
というのは、ローマ字仲間であった荒沢分校の塚田忠義のほずである。「仲間を悪い道にひきずりこむな。反省しろ」とつめよられ、「はい、これから気をつけます」と、誓約書を書いてしまった秀一なのだ。

「アメ ノ タメ ホンコー ニ トマル。7、スイヨービ、クモ
リ。アサ コツパヤク ポリ ガ キタ。ヤツ モ ガサ オ
ヤッテ キタ ト イウ ノ ダ。ナント イウ ウカツナ コト

ダッタロー。ドーモ ヤツ ノ タイド ワ ハツキリ トワシ
ナイ ガ アルイワ ケイサツ マデ モチダス ツモリ カモ
シレナイ。コーチョー カラ モ セツキョー ノ ツズキ オ
キカサレル。ウチ エ カエツタ。コー イロンナ コト ガ モ
チアガツテモ ワリアイ ニ レイセイデ イラレル ノ ワド
ーイウ ワケダロー? 8、モクヨービ、ハレ。5ジ ニ オキテ
デカケテ キタ ガ コツチ ニ ツイタラ モー 10ジ ニ
チカイ。ツカレテ ジュギョー オ スル キ ニモ ナレナイ。
ローマジ ノ ニッポン ガ キタ。カクベツ ニ オモシロイ
コト モ ミアタラナイ ヨーダ。ヒルネ オ シタラ 12ジ
スギ カラ 3ジ マデ チヨットモ メ オ サマサズニ グツ
スリト ネムツテ シマウ。9、キンヨービ、クモリ。モリオカ
ノ イチゲンシヤ カラ ”ホーゲン ト ドゾク” ト イウ
ザツシ ガ オクラレテ クル。カナリ オモシロイ。ザツシ ノ
”イズミ” モ キタ。コノ ザツシ ノ トリエ ワ アタイ
ノ ヤスイ トコロ カ? オモシロイ ホン ノ ナイ コト
ト キ ガ チル コト ト ノ タメニ ドーモ マトマツタ
ブンショー ガ デキナイデ コマル。カンキョー オ カエタ
ラ ヨイ カモ シレナイ。10、ドヨービ、クモリ。アメ ノ タ
メ ナカナカ デカケラレズ、4ジ ニ ナツテ シュツパツシタ
ノデ、ウチ エ ツイタラ モー マツクラダ。タダ ダイブ
ナガク アルイテモ マエ ノ ヨーニ クタビレ ナク ナツタ
ノ ワ ナレタ タメ カ、チヨット フシギナ キ ガ スル。
ロシアカクメイシ オ トリダシテ ヨム。ワレワレ ガ チヨツ
ト カンガエルト イチジニ ドット クル ト オモワレル カ
クメイ ガ シダイ シダイ ニ ウヨクカクメイ カラ サヨク
カクメイ エト ウツツテ ユク コト ワ キョーミ ガ フカ
イ。11、ニチヨービ、ハレ。ゴゴ ニワ ツルオカ エ デカケル。

M ワ コレカラ 20カ グライ ルスイ スル ト イツテ イ
 タ。ドコエ ユク ノ カワ キカナイ。ツルオカ ノ ユービ
 ンキョク カラ オムラ ノ Mi ト Tu ト ニ ユーピン オ
 ダス。ソシナニ トーク カラ ダス コト ワ マコトニ バ
 カゲテ イル ノ ダ ガ、トープン シカタ ノ ナイ コト
 ダ。トーシヤバン ワ カオー ト オモッタ ガ、M ノ ハナ
 シ デワ キヌバリ デ ナクトモ マニアウ ト イウ カラ
 ミアワセル」

昭は煙草をとった。

「M、M、M」

煙をくゆらしながらつぶやくと、昭は日記のページを前にめくつた。七月二十七日の文字の上を、昭の声はたどっていく。

「ハレ。キョーモ スコブル アツイ。マナツ ニ ハイッタ コ
 ト オ オモワセル。ツキ モ シロツボク カンソーシテ イル。
 マキモト ト イウ ヒト カラ テガミ ガ クル。マエニ
 サツカドローメイ ニ トイアワセタ コト ニ タイスル ヘンジ
 ダ。シヨーンナイ ニ オケル ブンカウンドー ワ マダマダ
 フルワナイ ラシイ。シカシ レンラク ガ ツケバ モット ウ
 マク ヤレル ダロー」

煙草の灰が日記の上に落ちた。昭のほほがふくらみ、あわてて灰を吹きつける。

「牧本だな」と、昭は満足そうに言った。日本プロレタリア作家同盟山形支部準備委員会の委員長である牧本進が、準備委員会のできたことと、その仕事について書いている昭和七年六月五日の荘内新報を昭は図書館の人に見せてもらっていたのである。Tu は、ローマ字仲間の塚田、Mi は、やはり大泉ローマ字会の仲間である赤川水利組合の三浦鉄太郎のことに違いない。警察に家探しをされ、まだ何日もたつてはいないのに、仲間へ手紙をだし、牧本進に会いに行つ

た秀一の動きには、校長に誓約書を書いてしまった、あのふぬけな姿は見られない。

「12、ゲツヨービ、クモリ。アサ ニ カエツテ クル。プロブン
 ガク ガ 80 ページ バカリ トワ ナサケナイ。テキ カイキユ
 ーノ コーゲキ ト ヨミテ ガ カネ オ ハラワナイ タメ
 ダロー。マツイ ウジ カラ ハガキ ダ。スタンブ ワ ツル
 オカト ナツテ イル。キシヤ ノ ナカ デ カイタ ノ ダ。
 トーシヤバン ワ M クン カラ キイタ ヨーニシテ ヤツ
 タラ イマ アル ノ デ ケツコー マニアウ。タダ カキカタ
 ト スリカタ オ モット ケンキユースル ヒツヨー ガ ア
 ル。13、カヨービ。ハテシ ナキ ギロン ノ ノチ ワレラ
 ノ カツ ヨミ、カツ ギロン オ タタカワス コト……」

昭は思わず目をこすった。もう十二時に近く、昭の疲れきつた目は赤かったが、昭が目をごすったのはそのためではない。

こすった目をしばたき、昭は九月十三日の日記を読みついだ。昭和七年九月十三日、それは、斎藤秀一が、塚田忠義、三浦鉄太郎とともにしよっぱかれたその日であり、秀一は二十三才の若者であった。

その日の天気は抜けている十三日の日記の文は、あらかじめ、日と曜日が刷られている日記帳の、その日の枠を越えていた。それは十四日に続き、十五日に続き、十六、十七、十八日と、二ページにまたがって続く詩であった。

Hatesi naki Giron no nohi

Warera no Katu Yomi, Katu Giron wo tatakawasu koto,

sikasie warera no Me no Kagayakeru koto,

50-nenzenno Rosia no Sinen ni otorazu.

Warera wa nani wo nasu-beki ka wo gironsu.

Saredo,tare hitori,nigirisimetaru Kobusi ni Taku wo tata-
kite.

'V NAROD' to sakebi-iduru mono nasi.

Warera wa warera no motomuru mono no nani naru ka wo siru,

mata Minsyû no motomuru mono no nani naru ka wo siru,

sikasite,warera no nani wo nasu-beki ka wo siru.

Zituni 50-nenzenno Rosia no Sinen yori mo ôku siteri.

Saredo tare hitori,nigirisimetaru Kobusi ni Taku wo tatakite,

'V NAROD' to sakebi-iduru mono nasi.

Koko ni atu maritaru mono wa mina Seinen nari,

Tuneni Yo ni atarasiki mono wo tukuri-idasu Seinen nari.

Wareare wa Rozin no hayaku sini,sikasite,warera no tuni katu-
beki wo siru.

Miyô,warera no Me no kagayakeru wo,mata sono Giron no hage-
siki o.

Saredo,tare hitori,nigirisimetaru Kobusi ni Taku wo tatakite,

'V NAROD' to sakebi-iduru mono nasi.

Aa Rôsoku wa sudeni mitabi mo torikareru,

Nominono no Tyawan niwa tisaki Hamusi no Sigai ukabi,

wakaki Huzin no Nessin Kawari wa nakeredo,

sono Me niwa, haresinaki Giron no notino Tukare ari.

Saredo,nao,tare hitori,nigirisimetaru Kobusi ni Taku wo ta-
takite,

'V NAROD' to sakebi-iduru mono nasi.

-Isikawa-Takuboku

7

裁判を受けることはまぬがれたものの、秀一は働く場所を失った。
しよっぴかれる二日前の日づけにさかのぼり、秀一は代用教員をや
めさせられてしまったのだ。

二カ月しかたため十一月の末、秀一はまたつかまる。それは、日
本プロレタリア作家同盟山形支部準備委員会鶴岡地区委員会の組織
部長、教育調査部長としてのはたらきに対してのしめつけであり、
十二月には、「赤旗」「無産青年」を配ったことを理由に三度目のし
よっぴきがあった。

庄内方言についての秀一の文が、「方言と土俗」「方言」「土の香」
などの雑誌に発表されはじめるのは、そのころからである。それら
は、集めた単語を並べただけのものや、できあいの文法にあてはめ
てみただけのものなど、ただそれだけを見るならば、仕事を失った
男の手慰みのような感じがしないわけではない。しかし、秀一にと
って、方言は、ローマ字、そしてエスペラントと、分ちがちがたく結
びついていたのだ。

方言についての秀一の考え方ははじめて現われた文は、山形県教育会が出していた「山形県教育」の昭和七年二月の号、「方言の矯正」である。

近頃教員の会合や研究会があるときまづ問題になるのが「言葉の悪い」ことであり、「方言矯正」の必要なことであるやうだ。それでいて矯正論者自身が「ミナサン ハチオン ヲ タダスク スナサイ」と言ったり、左程ひどくない迄も山形をヤマガダ、酒田をサガダ、鶴岡をツローガと発音したり、先生をスエンスエー、衛生をウエースエーの如く口蓋化させて発音する如きは頗る滑稽である。従つて私の如き音声学の素人がいさゝか口出しをして見ようと思ふのであるが、幾らかでも参考になればこの上の仕合はないし、もし意見が間違つて居れば黙殺して頂いても、手ひどくやつ付けて貰つても一向さし支へないのである。

考へて見るに方言矯正の声のみ徒らに高くしてその実の見るべきものがないのは、論者が方言と標準ごと就いての明確な概念を持つて居らず従つて又矯正の方法手段を研究することが不十分な為であるらしい。

方言とは或る国語のそれぞれの地域又は国民層に於いて持つ独自の形態であると考へることが出来るし、標準語とは或る国語のその国語を語る総ての人々に理解され得る標準的な形態であると考へることが出来る。而して方言矯正とは方言を全然廃棄して総てを標準語にかへるのが目的であるか、それとも一定の時と場合に限つて標準語を用ひるのが目的であるかが問題になる。具体的な例で言ふと、教師が教室で教授し、児童が質問に応ずる時の言語を標準語にし、教師相互児童相互間の会話や、又は彼等が家庭で操る言語は方言でさし支へないのであるか、それとも友達と話す時でも、家庭で言ふ時でもあらゆる場合に標準語を使用することが理想であるか？

大昔は言語がなかつたが、人間の生産活動が一定の段階に達すると彼等相互の意志流通機関としての言語が早くも発生した。それ以来今日に至る迄言語は生産諸関係の発達と変革とに沿ふて発達し、変革されて来た。それで生産活動の活潑な所の言語は流動性に富み、発音が明晰であるが、反対にその鈍い地方の言語は変化が頗る緩やかで、発音も不明瞭である。試みに東京方言と山形県の方言とを比較して見るがよい。前者は発音が明瞭であり、言語活動の速度が速かであり所謂「歯ぎれがよく」て、聞く者の耳に一種の快感を与へずにはゐない。而かも東京方言の言語としての形態は日に日に変わりつゝある。一方山形県方言は発音が不明瞭で、まるで口の中で言ふやうな感じを与へて「ズーズー弁」と称せられ、聞く者に情味を伝へるには好都合のやうであるが、甚だまだるっこく想はれ、その上十年一日、否百年一日の如く変化に乏しい。これ東京が生産の中心であり、従つて又政治、文化の中心であつて、その社会全体がすばらしい底力を以て廻転しつゝあるが故であり、山形県はその大部分が農村であつて昔ながら鋤で耕し、鋤ですいて、百年前の米の出来高と今年の米の出来高との間に左程大きな開きがない為である。その証拠にはたとへ東京でも一步郊外へ出て畠に耕す百姓の語るのを聞き給へ。彼等の言葉は市内の労働者や商人のそれとは似ても似つかないものであり、東北方言を髣髴させるものがある。言語の地理的影響を説く人もあるが、それは直接に言語に影響するよりは、生産諸関係を通じて間接に影響すると考へる方がヨリ正しいであらう。

さて日本の標準語は東京の中流階級の間が日常使用する言語を基礎として、これを洗練したものだと言はれてゐる。その中流階級の間とは具体的に誰であるかを考へて見ると、それは官吏であり、教師であり、又会社員であり、商人であり、上層労働者である。所が山形県人の大部分を占めるものは勿論農民であつて、東京の中

流階級の人間とは甚だしく彼等の経済的地盤の性質が異なつてゐる。それ故にたとへ山形方言を総て標準語に改めやうとしてもそれは絶望に終ることが明かであり、又そんなことをする必要も認められない。それで我々は、例へば他地方の人々と会話をする必要がある時、或は演説でもするような改まった場合等に性格に標準語を語り、他人の標準語を聞きとることが出来れば充分だと信ずる。それは必ずしも流暢であることを要しないであらう。学校教育に於いても教室だけで標準語を用ひ、それ以外は、堅固な地盤と伝統とを持つてゐる方言で話すことこそかへつてすゝむべきことではあるまいか。要するに標準語は生産の、従つて交通機関、印刷術、電信、電話、ラヂオ等の発達に伴ふ必然的な産物として生れたものであるから、我々はそれらの機関を利用して相互に意志を疎通し得る程度にまで標準語を操り得れば十分なので、それ以上であることを要しない。

こんなふうには、秀一の論文は続いていく。代用教員となつて、都からまいもどつてこなければならなかつた秀一は、小さな、貧しい分校での、国定教科書による教育の中で、いやが応でも方言と標準語のもつれあいを見つめねばならなかつたのだ。そして秀一にとつて、それは単純な言葉の問題ではなく、田舎と都、現実と理想、資本主義と共産主義のからみあいでもあつた。

Dô kangaetate yûtu da komma kudaranai Yarigai no nai Dai-yôkyôin nado wo sararito yamate motto isegaskuteru yoi kara hontôni onore no Sigoto da to onoreru mono ni tadusawaretara. Sô iu koto wa tuginô Syakai de de naito konai no kamo sirenai.

大平分校にいた昭和七年一月二十二日、秀一はこう日記に書いている。前の日には、こんなことがあつた。

Syokunkwai de Honkô e yuku. Irunono tôri tumatarai Kenkyû-dryegyô to, Hihyô no tameno Hihyô to Zenshokuin no Nanne ni yotte no Kôyô hitorizemeno Syokunkwai da. Kyôdo-tokuhon no Sudigaki wo motte itara sinsetuni hihyôsinaide Mottai wo tukete hinkuraretu no wa itiban syaku datu.

こんな暮らしの中で、次の社会を夢見る秀一は、次の社会を抜きにして、「ハチオン」ヲ タダスグ スナサイ」と標準語を強いる教師たちに我慢がならなかつたのだらう。

「山形県教育」二月号に「方言の矯正」を発表したその年、秀一は「方言の単一の国語への発展」という論文を同じ雑誌のいくつつかの号にかけて発表するが、七月号の中では、「一つの国民の各種の方言は単一の国語へと統一され、遂には各々の国語が唯一の世界語にまで統一されることが理想である。これこそ始めて意思の疎通が十分となり、労働経験も精神的文化の交換も真に完全になる筈である。」方言が単一の国語へ統一される為にはその前提としてそれぞれの方言を使用する人々の依つて立つてゐる生産諸関係が総ての地域に於いて同一になり、階級及び層の区別が失はなければならぬ。我々は方言の単一の国語への発展を欲し、又必要とする以上、右のやうな社会状態を作り出すべく努力を惜んではならぬ。」「方言の矯正」は根本的には右のやうに理解されるべきものである。」「よりあからさまに意見を述べている。

ふるさとの言葉、庄内方言がやがて消えうせ、日本語さえも消えうせてしまふ日。そして、「Bonan matchoni」というエスペラントの挨拶が戸口や窓でかわされる朝。その朝こそ、秀一にとつて、あのカタカナ短歌に出てくる子どもたち——泣きわめく赤ん坊を負つてノートに字を書く、墨も小刀も買えない子どもたちの暮らしが変わ

る時であり、人殺しの戦争を忠義のためだと教えなければならぬ教育が変わる時なのでもあった。
庄内方言からエスペラントへの深い谷間。ローマ字は、そこにかかる橋であった。

8

三度にわたってしょつぴかれ、もはや中等教員はおろか、小学校の代用教員にさえも雇ってもらえなくなつてしまつた秀一は、今は櫛引町となつた山添村の自分の家、泉流寺の本堂の一部屋を根城にガリを切り、「文字と言語」という雑誌を出す。昭和九年九月のことである。

その年の三月、満州国の肯定に溥儀をたて、日本は中国大陸にまします力をふるおうとしていた。そんな時代の中で出された創刊号のはじめのページで、秀一は「文字理論の確立」という題でこう書いている。

これまで我が国に文字の理論を扱つた雑誌は、少くとも私の知る限りではなかつた。単にこれだけの事実からでも、従来文字の研究が如何におろそかにされてゐたかが窺はれるではないか！ 文字は言ふまでもなく、我々の日々の生活と離れることの出来ない密接な関係を持つてゐる。従つて文字の研究がそれ程おろそかにされてよい理由はないだろう。今までもとも文字に関する研究はあつた。しかし大ざっぱな言ひ方を許して貰ふならば、所謂説文学は我々の日常生活から離れた骨董的な研究に没頭し、一方国字改良論者の間に行はれて来た文字の研究は、反対者を説き伏せる法、だとか、ローマ字やカナモジの附け離しのきまりだとか、又ローマ字綴り方論の如き、いづれも必要なものではあるが、悪く言へば末梢的な研究に終始して、根本的な文字理論は以前として閑却されてゐる。

かういふ根本的な文字理論は如何にして確立されるか？ 簡単に言へば第一に進歩的な立場から研究されること、第二に文字だけを切り離さないで、言語との普段の結合の姿に於いて把握されることが必要であらう。

石賀修、石黒修、大島義夫、鬼頭礼蔵、黒滝成至、高倉テル、東条操、平井昌夫など原稿によつて十三号まで続いたこの雑誌は、三十五部から五十部ほどの数が出されていく。二カ月に一度の発行をこころざしてはじめの号が出された、その翌年の昭和十年三月には四号を重ね、願つたとおりの出し方ではあつた。しかし、四号の編集だよりでは、こう書かれてもいる。

この雑誌は原稿は只で書いて頂き、印刷の労力も見ないで、それでも猶読者諸君から送られる会費は紙代にも足りない有様で、号を重ねる毎に発行者の損が増すばかりです。贅沢は言ひませんが、せめて紙代位出るやう、諸君の御力で取計らつて頂くことは出来ませんか。その為に新しい読者を御紹介下さるやう、そしてもし出来るならば切手でも御寄附下さるやう御願ひ致します。

その年の一月、秀一は「東京方言集」という本を出してもいる。ガリ刷りではあるが、鶴岡の印刷屋に頼んだものであり、目次には、石黒魯平、東条操、外山正一、永田吉太郎、福里栄三、村田鈴城という名前にまじつて齋藤秀一の名前も見える。

「文字と言語」の四号には、その広告文がのつてゐるが、こんなふうな手ぎびしい東京への言葉がまじつてゐる。

この方言研究の盛な時代に、内地で一番研究のおくれた府県は、政治、経済、文化の中心地東京だとは何といふ皮肉な現象であらう！

父と母が、秀一に嫁をとらせたのは、その年のことであつた。同じ郡の広瀬村の坊さん、富樫国宏の娘、於英がその相手である。

秀一は乗り気ではなかつた。しかし、秀一の思想に心配をする父と母は、結婚によつて秀一の思想が変わることをひそかに望んでゐた。そればかりではない。秀一は、寺を継がねばならぬたつた一人の息子でもあつた。

次の年の五月、結婚をした二人の間に女の子が生まれ、はるみ、と名づけられた。しかし、その年の三月三十日の消印で、同じ県の方言研究家、斎藤義七郎にとどいた秀一の手紙の中には、こんな言葉が見える。

第九号はまだ発行しません。今日やつと原紙切りだけを終へたやうな有様で、これから印刷にとりかかり、製本して発送するまでにはもう一〇日位はかかりませう。今までにこの号位難産を続けたのはありません。一月は御承知の通り非常な寒さで原紙切りは殆んど絶望であり、それに寒さがひどいと体の具合も思はしくなく、その上家庭内のもめごとなども加はつて、とても印刷にとりかかる気力は出ませんでした。

もめごとの原因は、秀一の父母と於英とのおりあいの悪さであつた。

はるみの生まれた二カ月後、七月二十八日の鶴岡局の消印で、於英は秀一へ宛てて手紙を出している。うすいハトロン紙の封筒の裏には、東田川郡広瀬村字赤川、と実家の住所が書かれ、そのわきに、富樫、とただそれだけ実家の姓をそえている。

昨日の東荒屋の相談は子供の世話と秀一様のする別れるとかの相談

には同意しないでくれとの事でそれについて父はやはり先言ふたと変りなく言つてゐるし私は間接に貴方から言はれたあるべき儘に話しました

もうすっかり親達どほしの右の条件の事柄は出来てゐるし到底願はかまはないかと思はれます

次におぼんの仕末の忙しくならぬ暇な時何処かへ待合せて子供と三人連れで遊ぶ事にしませう

何より／＼貴方様の面影は永久に忘れません

あの帰つた人達どほしのお話細かに教へて下さい

子供の目は何時なつてもなほほろろ見てもらつたらよいかね色々と家で薬もつけましたがさつぱりよくならぬやうです

斎藤 秀一様

先づ俄かに心配しないで真から親達に服従して使つて下さい

はるみを引きとり、於英と別れたその年は、二・二六事件のあつた年である。そして、その年、秀一は、魯迅、葉籟士などの中国語の論文を日本語に翻訳し、「支那語ローマ字化の理論」というガリ刷りの本を四十部ほど出している。

昭和四十八年、亀岡市でおこなわれた第六十回日本 에스ペラント大会に中国代表団の団長としてやつてきた葉籟士は、かつての上海世界語者協会の指導者の一人であつた。エスペラントを中国解放のために、というスローガンを掲げて活動してゐた上海世界語者協会は、エスペラントの通信によつて、日本と戦う中国の立場を世界に訴えながら、エスペラントを中国の人たちの間に広め、中国語をローマ字化する運動にとりくんでゐた。その頃の中国では、人口の80パーセントが文盲であつたという。漢字よりは、はるかに学びやすいローマ字を使つて、知識を人々にいきわたらせようとする上海世界語者協会の思いは、秀一の思いでもあつた。秀一は「文字と言語」

にも、中国のローマ字主義者たちの論文を翻訳、発表し、相手側の機関誌などにも原稿を送っている。

昭和十二年、上海で発行されていた「語文」七月号には、「日本における漢字制限」という中国語の論文を発表するが、その年の五月、秀一が方言研究家斎藤義七郎に出した手紙の中にはこんなことが書いてある。

〔語文〕は、日本などでは見られない有益な雑誌ですが、どうもまだ充分には言葉の理解できない所があります。私はオトトシの春ヤツト支那語の勉強を始めたばかりの初学者で、これから大いに研究を積む必要を感じています。反訳をするなどは全くガラにもない話なのですが、今の支那には、言語方面の有益な論文があんなにあるのに、それを日本に紹介する人が殆んどいないのを見ると、ツイ手を染めて見たくなるのです。

秀一が国際ローマ字クラブを作り、全文エスペラントの雑誌である“L'Asino”を、相変わらずのガリ刷りで出したのは、同じ年の六月のことであった。四十部ほどの部数である。雑誌の名は、「ローマ字化」という意味であるが、中国、ソビエトの仲間の論文とともに、秀一自身も二つの論文を創刊号に発表し、田中館愛橋の論文を一つ翻訳している。

今、あなたたちの手に、新しい雑誌の最初の号を送ることは大きな喜びです。これは、あなたたち、東洋のローマ字主義者、特に中国と日本の同志たちの助けで現われることができました。わたしは心をこめて感謝します。

この号で、ソビエトのローマ字運動について、短い評論しか載せられなかったことが残念です。しかし、次の号には、尊敬するエス

ラント理論家、そして熱心なローマ字主義者、同志ドレーゼンと、モスクワのローマ字化中央委員会の同志たちが興味ある評論を書きます。読者の皆さん、ソビエトの同志たちの有益な経験に耳を傾ける日を待ってください。

わたしは、中国、ソビエト、日本以外の国々のローマ字主義者たちも、わたしたちの仕事を助けてくれることを願っています。そして、もし、中国と日本の同志たちが他国のローマ字主義者を知っていたり、文通をしているならば、わたしに教えてくれることを願っています。

わたしは、わたしたちの雑誌に対する、あなたたちの遠慮のない批評や要望を待っています。例えば、わたしたちの雑誌からどんな傾向を育てるとか、どんな部分を完全にするか、どんな評論を読みたいか、あなたが一番望むのはどんなテーマか、などを。わたしは、あなたたちの批評にそってふるまい、あなたたちの願いにできるだけこたえようと力を尽くします。この雑誌は編集者のものではなく、世界中のローマ字主義者のものです。従って、あなたたちの助言だけが、この雑誌を正しく導き、発展させることができるのです。

わたしはエスペラントを数年前に習ったのですが、著作は素人です。わたしによつて書かれ、訳された評論に、あなたたちが文法の間違いを見つけることをわたしは恐れます。もし、見つけたならば、直してください。お願いします。

創刊号のあとがきを日本語で言いかえてみれば、こんなふうな言い方になる。秀一が自分でことわっているように、文法の間違いは、一ページのその文のそここにまじっている。

第二号は、その次の年の三月に出た。五月には「文字と言語」の十三号が出る。十五日の日づけである。そして、東北帝国大学の庶

務課に働き口を見つけ、雇の辞令をもらつたのは五月二十日の日づけであつた。

出発の際貸してやつた袴時折入用の事あつて先達も繁方出征する時借りたし近々又いる事も有るから来る時忘れない様に持つて来て貰ひたい

十月十六日

その年、仙台の秀一に宛てた父の葉書である。同じ月の三十一日には、こんな葉書を父は出している。

兼ても申上げました通り新助「ダ」永ら病気の処秋冷と共二俄二病勢変り十月十八日より庄内病院へ入院致して居りましたが同廿九日午後二時半遂二死亡致しました当葬儀八十一月七日午後一時執行致します

右取敢す御知せ迄申上げます。

新助ダダと呼ばれていた、母の兄、井上新助は、かつて花嫁於英を迎えに、富樫家へおもむいた人間であつた。葬式のあつた十一月七日、秀一は、父秀苗とともに、仏の前で経をよむ。その夜、ふるまいの酒をよばれ、そこに秀一は泊まつた。口数の少ない秀一ではあつたが、酒が入ると世間話に体をのりだしたものだという。

秀一が特高につかまつたのは、その数日後、十一月十二日のことである。年が明けた昭和十四年の四月二十三日、秀一は起訴をされた。「以テコミンテルンノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタルモノナリ」と、起訴状の最後には書かれている。

刑務所ぐらしで体がまいり、肺結核にかかつた秀一が家に帰ることを許されたのは、それから一年たつた昭和十五年の四月であつた。

まだ刑務所にいた時の日付、昭和十四年十一月十日に出された日本謄写芸術学院の「謄写研究」というパンフレットが、鶴岡市立図書館の秀一のものを集めた袋の中にまじつている。

ガリ版の道具や入門書を紹介するそのパンフレットをよく見ると、赤鉛筆で書きこんだ二重丸が二つある。一つは「謄写印刷新教本 特価一円五十銭」という文字の頭にてあり、もう一つは「ゴシック書体の製本と印刷 特価一円五十銭」という文字の頭の上にある。秀一がガリを切つた「文字と言語」の漢字かなまじり文の字体は、丁寧なものではあつたが、ゴシック体よりはかなり見にくい筆記体であつた。

そのゴシック体でガリを切ることもできず、昭和十五年九月五日、秀一はその一生を終わるのだ。明治四十一年十二月二十四日生まれの秀一は、数えてみると三十一年八ヵ月十二日の人生を送つたことになる。

死ぬ二ヵ月ほど前の七月十日、彼が宮城控訴院刑事部に送つた書留便の受取が、鶴岡市立図書館に残っている。控訴の書類を送つたのだろうか。間際まで、彼は負けることをきらつていたのでない。

間際といえども一つ、死ぬ八日前の八月二十八日の日付で、於英の父は書留便を秀一に送っている。「見留印在中」と封筒に書かれた手紙の文は、秀一から借りた印鑑を返すことを知らせ、「残暑の折から御身御大切」と結んでいる。しかし、数えてみると、手紙の文はたつた七十九の文字からできている。

印鑑は、於英の籍を斎藤家から外すために使つたものであつた。於英の籍を抜くことを、秀一は死の間際まで許さなかつた。

「この部屋ですけどナー」

案内の声ははしゃいでいる。木魚と鐘を横目に見て、昭は本堂の奥に入った。目で数えると、畳の数は八枚である。

「どちらを頭にして寝ていたんですか？」

「頭はこちらですナー」

案内の女は縁側を指さした。

昭は縁側に背を向けしゃがんでみた。開け放したふすまの向こうの黒ずんだ板壁が、空の光をさえぎっている。

「死ぬまで、便所に行つてましてナー。でも、腹膜で腹がふくれてしまつてからは立つのも大変で、よくはるみさんを選んで、起してくれつて頼んでました」

「はるみさん、その時いくつだったんですか？」

「はい、五つ……五つですナー」

「数えですね？」

「はい、数え……数えですナー」

「おばさん、そんな時、ここにいたんですか？」

「はい、もう、ここにもらわれてきていました。もう、女学校サ行くころでしたナー」

もらわれつ子の政井は、秀一のいとこであり、新助ダダの娘である。養ひ親の秀苗、たみ糸の二人は死に、政井の婿さんは、役場に勤めながら寺を守っている。

「はるみさん、秀一さんに起してくれつて頼まれると、おつかない、おつかないつて、逃げてしまつてナー」

秀一が東北帝国大学に勤めるため仙台へたつたのは、娘のはるみが二才の誕生日を迎えて間もなくのところである。半年の仙台ぐらし、一年半の刑務所ぐらし、あわせて二年、もの心のついていく娘とほとんど会うこともなかった秀一に、どれだけの親しみをはるみが持てるだろう。ある日いきなり現われて、暗い本堂の一隅にふくれた

腹でひねもす横たわる秀一の姿は、はるみにとつてほほえめるものではなかつたはずだ。

そんな四才の女の子の手を借りたかつた秀一。たつた四才ではあつたが、はるみは秀一のたつた一人の子どもであつた。そのはるみは、今は横浜で人の妻となつてゐる。

部屋を出る政井の後につきながら、昭は名残惜しそうにその部屋を振り返つた。縁側の向こうのガラスに、青い竹のむらがりがつつてゐる。

政井は棟つづぎの位牌堂に昭を案内した。正面には、色どりの薄れた坊さんの蔵がかざつてある。

「これ、道元さんです。この下の戸棚に秀一さんのものが隠してあつたんですけどナー、警察もここまでは探しませんでした。ハイ」
道元のまわりにかざつてあるいくつかの位牌の中には「大雲秀一 高和尚」という秀一の戒名も見える。

手を合わせた昭の目に道元の太い肩がうつつていた。それは、写真で見た秀一の眉とどこか似通つてゐる。眼鏡の下の大きな目、厚いくちびる、広い富士額。写真の中の秀一を思い浮かべながら、昭は目をつぶつた。

「それじゃ、墓サ行きましょ」

政井が声をかけ、昭は後をついていつた。母屋にまわり外へ出ると、ばあさんたちが集まつて庭の草取りをしている。盆の前の日なのだ。

「この自転車、借りてきましょ」

政井の指さした自転車に昭はまたがつた。荷台には丸めたござがくくりつけられている。

門を出ると、稲の緑がゆれてゐた。緑の向こうに並ぶ小さな墓石をめざして、政井と昭はペダルを踏んだ。

墓場のそばの農道で二人は自転車を止めた。畔道を歩くと、色と

りどりの野の花が咲く小さな墓場が近づいてくる。

「うちの墓、これですけどナ、小さくて、はずかしくて……」

「昭和三十三年十月建之」と刻まれた斎藤家の墓石の高さは、昭の胸の高さと同じほどだ。

「墓を建てるのも大変なことですからナ、死んでから三十三年たつて石塔を建てられない時は、石仏といって、埋めた時に置いた石に字を刻んでもらうんですよ。ほれ、この辺一杯にあるでしょう」

昭はあたりを見まわした。漬けもの石がごろがるように、なるほど石がごろがっている。

「秀一さんは、ここに埋まっています」

政井は、斎藤家の墓石の裏側に昭を導いた。横たわつた卒塔婆の下に、石ころが四つかたまっている。墨の跡さえ残っていない卒塔婆の数も、数えてみれば四本だった。秀一と妹、そして父母の四人の骨がその下にはあるのだろう。

うづくまり、手を合わせる昭の耳に、川の音が聞こえる。昭は顔を上げた。

「あっちは、川ですか？」

「赤川ですナ。赤川の向こうが、ほれ」と、政井は言つて、残念そうに言葉をつけたした。

「月山は、雲で見えせんナ」

「ウーン」と、昭も残念そうになつた。

「でも、鳥海は見えますナ。それから、あれが金峰山、あれが母狩山、それから勝地山」

山の名前を次々とあげ、政井は体をまわしていく。東に、西に、南北に、山は切れ目なくはりめぐり、平野をかこんでいる。

昭は、ふと、駅前山伏の像を思いだしていた。ほら貝を吹く山伏の精一杯にふくらんだほほは、斎藤秀一の短い一生のようなものではないだろうか。壁のような山にかこまれ、壁のような山を登り、

空をめざして秀一は進んでいったのだ。それは、一つの土俗であり、一つの信仰であつた。

なぜか、昭は、道元の「正法眼蔵」の言葉を思いだしてもいた。手あたり次第に本を読んだ二十才の頃の仕込みである。それが分かつた昭ではなかつたが、今、不意に、昭は一つの言葉を思いだしてもいた。

「ただしたをうごかし、こゑをあぐるを仏事功德とおもへる。いとはかなし」

打ち込み担当 東條慎生

「幻視社」読者の皆さまへ、最近の向井文学に関する状況を簡単に紹介したい。まず、「文芸にいかつぷ」の三〇号(新冠文芸協会、二〇一二年一月)には、シャクシャインゆかりの地を歌った向井恵子の詩「判官館」が掲載された。今号の掲載はかなわなかったが、向井恵子の詩(特に朗読が素晴らしい)についても紹介していきたい。

また「向井豊昭アーカイブ」で公開していた中篇「用意、ドン!」が、「早稲田文学6」(早稲田文学会、二〇一三年八月)に収録されるという望外の慶事があった。もちろん手書き原稿のデジタル化を担当した東條慎生のクレジットも添えられている。商業媒体への収録にあたっては、筆者が原文と対照して校訂をやり直し、また解説文「二〇一三年の向井豊昭」を添えた。

ほかにも筆者は、未来社のPR誌「未来」で連載した「向井豊昭の闘争」に絡めて、二〇一二年に東京理科大学と筑波大学で向井文学についての講演を行なっている。また、関西エスペラント連盟の機関紙「La Movado」七三九号(二〇一二年九月)でも「向井豊昭の闘争」が紹介された。

「幻視社」六号で筆者が「ある学術出版社」の「アイヌと思想」

を扱ったアンソロジー本に寄稿したと書いた向井論は、そもそもの企画自体が頓挫してしまったため発表が危ぶまれたが、結局、大幅な加筆修正を施し、筆者の編著『北の想像力』(仮題、近刊)に収めることとなった。同書には、東條慎生による鶴田知也論、渡邊利道による円城塔論も掲載されている。東條の尽力で「向井豊昭アーカイブ」も順調に更新を続け、現在は向井の早稲田文学新人賞受賞作『BARBARA』の原型長篇である『骨踊り』を分割掲載している。

「早稲田文学6」の刊行後、「東京新聞」九月二六日夕刊に掲載された沼野充義による文芸時評では、「小学校の運動会から、恋愛に至るまで、人生の様々な局面での「用意、ドン!」というかけ声をちりばめながら、「へんなおじさん」のように飄々と老境の感慨を綴ったこの作品は、石原(引用者注・慎太郎)的マッチョ主義の対極にあつて、不思議な味わいがある。」と評された。沼野は過去にも、新聞時評において向井作品を好意的に取り上げたことがある。

沼野は向井について「十分な声望得られないまま亡くなった」とも述べているが、これに対しては絳秀実がTwitterで異論を述べ、むしろ「御用評論家や文壇編集者が、向井のヤバさを忌避していただけだろう」と分析している。絳はまた「最近若い書き手の向井論複数読」み、それを評価するようなコメントも添えている。この「若い書き手の向井論」とは、「子午線 原理・形態・批評」の創刊号(二〇一三)に掲載された長篇評論「遊歩する情動——向井豊昭と短歌」(綿野恵太)等を指している。

「用意、ドン!」は、向井によってエスペラントから訳された

ヴラジミール・パークマンの詩が（著作権保持者の了解を得たうえで）収められるなど、エスペラントが重要なモチーフとなっている。星田淳によれば、エスペラントの詳細な説明が出てくる文学作品としては、六八八ページのうち、三〇ページが割かれている五木寛之『青春の門 第七部』（一九九三）以来のこと、だという。

「用意、ドン！」の商業誌掲載と歩調を合わせるかのように、柴田巖・後藤斉編、峰芳隆監修『日本エスペラント運動人名事典』（ひつじ書房、二〇一三年）が江湖に問われた。この事典では、エスペラントイストとしての向井の仕事がコンパクトに網羅されている。

こうした状況をふまえ、未発表の遺稿でこそないが、「幻視社」七号では返歌として、「用意、ドン！」と対を為すかのような「エスペラントもの」であり、『人名事典』でも言及される「Saito-Hidekazu」を、ふたたび世に送り出すこととした。

本作は向井の第二小説集『ここにも』（私家版、一九七六）を初出とするが、現状、わずかに北海道立図書館と北海道立文学館で閲覧できるのみ、となっている。そのうち、文学館に所蔵された版には、更科源蔵宛ての署名が残っており、向井豊昭がごく一部の親しい人間にのみ頒布したものと推測できる。読解にあたって、「用意、ドン！」のほか、「向井豊昭アーカイブ」に再掲した、向井の手になる書評文「裏側の人たちの裏はどこに？——「反体制エスペラント運動史」を読んで——」も参考となるだろう。

本作は山形出身のエスペラントイストにしてローマ字教育運動の先駆者でもある斎藤秀一（一九〇八〜四〇）に取材した小説だ。

彼についてのまとまった伝記としては、佐藤治助『吹雪く野づらに エスペラントイスト斎藤秀一の生涯』（鶴岡書店、一九九七）が、巻末の年譜を含め、特に記述が詳しい。また、高杉一郎著、峰芳隆編『ひとすじのみどりの小径』（リバーロイ社、一九九七）の一章「もうひとりの架橋者がいた」でも、斎藤秀一が語られている。加えて、小林司が斎藤秀一についての伝記を書いていたと伝えられるが、刊行前に小林は没した。

『人名事典』のほか、本作についての言及がある論文としては、歴史教育者協議会編『草の根の反戦・抵抗の歴史に学ぶ』（平和文化、一九九八）の第七章「若き言語学者・斎藤秀一の抵抗」（升川繁敏）がある。同論の冒頭では、本作に出てくる「20 ページを／ヒラキナサイ！」／ヒトゴロシ／チュウギ ト オシエル／ココロ ワ クライ」という秀一日記の引用が紹介されている。

「向井豊昭アーカイブ」

<http://www.geocities.jp/genisha/mukaiyoaki/>